

サイコパス犯罪者どもの乗合船に穴が開いた

渡辺 久義

January 21, 2017

トランプ大統領は就任演説の冒頭にこう言って、わずかに間を置いた——「私はワシントン DC の権力を、あなた方アメリカ人民の手に取り戻す」。これは、脇で聞いていた一部の者たちには、許せない発言、宣戦布告を意味する言葉だったはずである。彼はしばらく後で、「このアメリカの **carnage** (大量殺戮) はこれで終わる」とも言った。「戦争」でなくこの言葉を使ったのは、これまでシリアなどで行われてきたような殺戮は、戦争でも、メディアの言う内乱でもなく、アメリカの一方向的な侵略だという意味であろう。

素朴な、日当を貰って抗議運動をやるような者たち、あるいは、日本人で事情を知らない人々には、「人民の手に取り戻す」の意味がわからなかったかもしれない——アメリカは民主主義の国なのだから、たとえ失政はあったとしても、主権在民は同じではないか。

アメリカという国が、メディアがその前提に立って喋っている、単純な民主国家でないことは、世界のほとんどの人が気づいているだろう。これを、アメリカ帝国と呼ぶ人もある。しかし最近では、その性格を指して **Deep State** と呼ぶことが多い。私はこれを「深層国家」と訳しているが、これはおそらく「深層構造」(**deep structure**) が意識されているからである。目に見える表向きには、アメリカはあくまで民主国家である。それは表層構造 (**surface structure**) であり、形式上はきちんと民主的に選挙を行う。しかしアメリカの権力の出所は、目に見えない深いところにある。それは大統領でも **CIA** でもない。だから民主主義の根幹である選挙の結果を、何とかして理屈をつけてひっくり返そうとする。つまり暴力や無法が許される。そしてマスメディアは、そして我々自身も心のどこかで、この暴力や無法を許容している——アメリカは世界の警察なのだから、それは許されるのでは？…

この背後の権力者 (グローバリストと呼ばれる) は、アメリカ国籍さえ持っていない者が多いと言われる。だからアメリカ自体が二重構造になっているのではない。アメリカが、国籍をもたない、あるいは国籍を考えない者たちに、ひそかに乗っ取られているのである。トランプはこれに対して立ち上がった。そしてアメリカを、アメリカ人の手に奪い返すと言っているのである。グローバリストには、「我が国の人民」などという観念はないのだから、人民の雇用や福祉などは考えない。自分たちエリート仲間の利益しか考えない。

このアメリカ合衆国の構造が、見抜かれないように努力しているのも、彼らであり、彼らはマスメディアをその目的に用いている。だからいくら新聞（日本もアメリカも同じ）を読んで勉強しても、それはわからないようになっていて、知るべき最も重要なことはほとんど報道されず、報道されることも“表層”だけで、その本質はわからない。だから大衆のほとんどは、自分がどんな世界に住んでいるのかがわからず、気分の悪い思いをしているはずである。例えば主流メディアは、米大統領選の本当の争点は何であるかを、決して言わなかった。

今のところ我々は、インターネットなど、いわゆる代替ニュースに頼るしかない。これを“市民ジャーナリズム”だとして、連携して企業メディアと対決し、悪に立ち向かおうと呼びかけている **State of the Nation** のようなウェブサイトもある。真実を暴く代替ニュースを、ワシントン - 主流メディアが、“フェイク・ニュース”だとして、法律まで作って弾圧しようとするのは、いかに代替ニュースが正しいか、いかに彼らが、自分たちの罪を暴かれるのを怖れているかを証明している。

先日、トランプは各新聞の記者を相手に会見を行った。トランプが全く怯むことなく、CNNなどを指して、「お前はフェイク・ニュースだ」などとやり合ったのは、痛快だけでなく、多くの人の目を開かせるものだった。世界中の人民を騙し続けてきたフェイク・ニュースの張本人が、フェイク・ニュースを取り締まるというのは、これはもう世の終わりということであろう。

就任式の終わった後でコメントを求められたオバマが、「しっかり現実を捉えていないと、やがてしっぺ返しを食うよ」と言っていた。現実？ 確かにその通りだ、ご忠告有難う。しかしこの“現実”は、トランプのしているアメリカの現実とは正反対である。この転倒ぶりは、フェイク・ニュースの転倒ぶりと同じである。オバマは DC をヘリコプターで飛び立つまで、ついにトランプと接点を持つことができなかった。

当たり前のことだが、トランプは就任演説で、意味深長だが節度をわきまえた言い方に終始した。腹の中では、「犯罪者ども」という言葉を押し殺したに違いなく、それはまた当然である。親子ブッシュ、クリントン、オバマの後に、腹をくくって悪霊の大掃除を引き受けた者として当然である。あえて邪推すれば、これは、あの冷静で強烈な印象を与えるプーチンから学んだものかもしれない。

暗殺はとりあえず免れた。しかし、その恐れはこれから毎日続く。あえて自分を犯罪者の立場に立たせてみるならば、やはりトランプを殺す以外に安住の場所はない。トランプもそれを半ば覚悟しているだろう。私はフィリピンのドゥテルテ大統領の言葉を買っている――

「暗殺が怖くて大統領ができるか！」しかしこれは、地位などに関係はない。命を賭けて不正を正そうとする者すべてに当てはまる。